

研究ノート

15年戦争期における《傷痍軍人の結婚斡旋》運動覚書

生 瀬 克 己

目 次

- 1 はじめに
- 2 いわゆる《障害者》と《傷痍軍人》のあいだ
——それぞれの障害者観をめぐって
- 3 軍人援護策と《傷痍軍人の結婚斡旋》運動
- 4 《傷痍軍人》と結婚した女性たち
- 5 おわりに

1 はじめに

思いもしない書物をいただいたことから、考えもしなかったテーマに気付いたりすることがある。本稿も、そうした体験のなかから、生まれでたものである。先日のこと、古い友人から奈良県の女性史に関する大部な書物¹⁾をいただいた。そこには、奈良県の女性史に関する膨大な年表が付されていて、それをながめていて、まことに興味ある事実を発見した。同年表から筆者の関心をひいた事実を摘記してみると

- | | |
|-------------------|------------------------------|
| 1938（昭和13）年12月26日 | 愛国婦人会，傷痍軍人の配偶者斡旋の内規を作成。 |
| 1942（昭和17）年2月26日 | 女子青年団に対して，傷痍軍人との結婚を奨励。 |
| 1943（昭和18）年4月 | 奈良県，傷痍軍人に花嫁を積極的に斡旋する。 |
| 1943（昭和18）年10月3日 | 大日本婦人会，軍人援護強化運動。傷痍軍人との結婚を奨励。 |

というようなことになる。要するに，愛国婦人会や大日本婦人会のような愛国・国防婦人運動団体と奈良県が一体となって，《傷痍軍人の結婚斡旋》運動を展開しているのである。それは，ちょうど，日中両軍が蘆溝橋で衝突した1937（昭和12）年7月に続く時期に当たっていることも，筆者の関心を刺激した。なぜなら，この時期にいたって，それまでとは異なる軍人援護策が打ち出されたのだとすれば，それは，それに見合う社会状況の変化があったはずで，それが，どのようなものであったのか，きわめて，大きな関心をいだかせるし，この時期が，いわゆる，優生運動の展開期にあたっており，精神障害者を初めとして，多くの障害者たちが社会からの《攻撃》にさらされたことを思いあわせると，いわゆる《障害者》と《傷痍軍人》のそれぞれに与えられようとした，いわば《相違》が何を意味するのかということも，見逃しにするわけにはいかない課題のように思えてならないのだ。

《傷痍軍人の結婚問題》というような，きわめてプライベートなところまで立ち入った軍人援護というのは，いったい，何を意味しているのだろうか。それよりも，何よりも，《傷痍軍人の結婚斡旋》運動とは，どこで，どのように考えだされ，どのように展開されて，何組くらいのカップルが誕生したのだろうか。その狙いは何だったのだろうか。これらの問題関心が，奈良県における上記のような事実を知った疑問であった。

さらに，日本の近代を思いかえしてみるならば，いわゆる，戦前期というのは，言ってみれば，《戦争の時代》であったということになろう。たとえ

ば、戊辰戦争・西南戦争といった内戦のほか、日清戦争に日露戦争、さらには、直接の参戦はなかったとしても、第一次世界対戦も無縁とはいいいがたいだろうし、15年戦争での敗北で戦前期が集結することを思えば、それは、まさに《戦争の時代》であったと言わざるをえないだろう。そうであるなら、《戦争の時代》なるがゆえに、人びとは、兵となった家族・身内の《戦死》と《傷痍》という、二つの事実に向かい合わざるをえなかったことになるだろう。思い半ばでの死は、その周辺の人びとに、絶ちがたい《無念》さを強いたことだろうが、それは、同時に、死者が健やかかなりしころの《思い出》と置き換えられて、残された者に慰撫の効果を持たないものでもなかろう。それに比べると、《傷痍》を負っての帰還は、《戦死》の場合とは、事情がまったく違って来るはずである。なぜなら、《傷痍》の身で、新たに社会や人びとにかかわって、その身に《障害》のなかった頃とは、まったく、異なった環境のなかを生きなければならないからである。

かりに、このような問題設定が可能であるとするなら、《傷痍軍人》という存在をキーワードにして、その社会と人びとを分析するということがなされてよいはずである。そして、さらには、そうした戦前期の諸状況の解決・解消過程として、戦後社会をとらえかえしてみることにもなされなければならないだろう。

本稿は、上記のような観点からなされる諸分析の第一着手をなすものである。

2 いわゆる《障害者》と《傷痍軍人》のあいだ

—それぞれの障害者観をめぐって

いわゆる《障害者》も、《傷痍軍人》も、その呼称は異なってはいても、ともに、その身体に《障害》をかかえての人生であるという意味では、その存在に、本質的な相違はない。けれども、この両者を《同一の存在》と考えることはできない勢力が厳然として存在していた。なかでも、《戦争遂行》

ということを至上命題とする人びとにとっては、とくに、そうであったにちがいない。なぜなら、この時期、いわゆる《障害者》は、優生学の理論・認識に包囲されていて、その存在は、民族の将来のために否定されるべきものとされていたからである。この優生学の主張の特徴は、加藤博史の研究²⁾に依拠すれば、以下のようになる。すなわち、①国民は健全な身体を持つように努力すべきである。あわせて、国家は、健全な身体の保全・培養の管理・統制にあたる。②犯罪者・精神障害者は「欠陥者」で、「異種」である。③断種法の制度は、「欠陥者の除去」という社会の宣言である。④「欠陥者」とは、たとえば戦争のような国家事業に協力できない、しない者をさし、断種法は「思想悪化」を防ぐスケープ・ゴートである、というようなことになる。

加藤の整理は、まことに正しい。しかし、《悪性の遺伝の防止》という名目のもとになされる、現実の優生学的主張に直接にふれると、それは、加藤の整理以上にすさまじいと感じずにはいられない。一例をしめすと、優生運動の主張を「アダ・ジュークは1720年ニューヨーク州に生れた大酒飲で低能で怠け者であった。彼には二人の男児と五人の女児とがあつた。その六代の後、子種千二百人を算するに至ったが、それが皆厄介者のみで、懶惰者、大酒家、淫蕩者、極貧者、病人、イデオットと云ふ幾ら歳をとつても四五歳位の子供以上に智慧の発達しない白痴、狂人、罪人の何れかでないものはなかったといふ」³⁾ ようなところのみを見ていた筆者にとっては、現実の優生運動のターゲットの広さに驚かされるのである。

たとえば、雑誌『廓清』が1918（大正7）年10月に「遺伝と環境」という特集（8巻9・10合併号）⁴⁾を組んだとき、その目次は、「遺伝と環境に就て」（島田三郎）、「生物学上より観たる遺伝と環境」（山内繁雄）、「社会上より観たる遺伝と環境」（安部磯雄）、「善種学上より観たる遺伝と環境」（永井潜）、「児童心理学上より観たる遺伝と環境」（高島平三郎）、「倫理学上より観たる遺伝と環境」（内ヶ崎作三郎）、「婦人問題より観たる遺伝と環境」（麻生正蔵）、「男女道德より観たる遺伝と環境」（一条忠衛）「犯罪学上より

観たる遺伝と環境」(大場茂馬),「酒毒上より観たる遺伝と環境」(片山国嘉),「梅毒上より観たる遺伝と環境」(岡村龍彦),「精神異常より観たる遺伝と環境」(樫田五郎)というような構成になっていた。その対象は障害者にかぎらず,あらゆる方面におよんでいたことがわかる。

そのいくつかの内容に立ち入ってみると,廓清会会長の島田論文は,その末尾において「我々の屢々指摘する如く,病は遺伝を防ぐ事なくして却て是を伝播するものがある,社会の境遇を無視して其改革に一点の同情なく,自己亦其影響を受けて特に子孫を不良なる遺伝をなし,人類の退化を招かんとするが如きは歎ずべきの限りである」(4頁)と主張している。優生学者永井潜の論文にいたっては,「勿論古来より門地とか血統とかいふものを重んじたことは,疑なき事実であるが然しその事が人間生活の上に如何に重要な意義を有つてゐるかを,真に自覚したのは,極最近のことである。而してこの自覚を吾人に促したのは,輒近生物学就中実験遺伝学の進歩に胚胎せる人種改良学(ユーゼニックス)であった。」(13頁)と主張して,世の中の《門地》《血統》と,彼の優生学とを同一の次元で論じてしまっている。さらに,高島論文にいたっては,「若しも此くして多くの祖先の恩恵を享けて人となった個人が,自己の關係に恥づべき病毒を感染したり,或は男女の不正の交りによって,悪しき遺伝的物質を受け容れるようなことあらば,啻に自己一人の不幸であり苦痛であるのみならず,前にあげた如き,多数の祖先を辱めることとなり」(27-8頁)などと主張していて,《悪性の遺伝》の問題も,高潔なる性道德も,同一線上で論議されている。一條論文にいたっては,婚外子までが「私生子其人には何等の罪も無いのであるが,親の不見識な淫行によって懐胎した子であるから,縦令父母から物質的に保護され相当以上の学校教育などを授けられても,遺伝上には非常なる不利益の境遇を有し」(34-5頁)などと論じられていたりするから,なんともすさまじい。ほかの論考に目を通すと,「今日文明の国々に於ては,或は犯罪の痼疾となれるもの,或は白痴瘋癲の如きもの,或は乱酒性となれるもの等を隔離し,又は断種法を施して,その害を後代に伝へざるを図り」⁵⁾などと端的に主張

されていたりする論文がある。このような論調をみていると、廊清会が、その趣意書にかかげた「公娼廃止は制度上の改善なり、為政者の決心能く之を断行するを得べく、之によりて良好の影響を社会に与へ、又推して人心の改善を裨くべし」(『廊清』創刊号)といったことは、いったいどこへいつてしまったのだろうかとの思いを深くする。さらに、優生運動の波及効果の大きさを改めて再認識せざるをえないだろう。そして、このような論調は、より一般的な啓発活動の展開によって、その《優生意識》といったようなものの浸透がはかられていったにちがいない⁶⁾。穂積重遠のような著名な学者が「近代人の結婚」と称して、おたがいの「健康証明書」の交換と、「悪い遺伝の無い人」を配偶者を選ぶことを求める啓発本⁷⁾を書いているのも、こうした目論見の一つと見ることができよう。

上記のような論調・動向は、優生運動を展開しようとする陣営にとっては望ましいことであろうが、優生運動のターゲットにされた人びとは大いに困惑したことだろうが、そのほかにも、こうした論調・風潮に困惑していたであろう一群の人びとがいた。言うところの軍人援護、とくに、傷痍軍人の援護を考えていた人たちである。《戦争遂行》を至上命題とする人びとにとっては、皮肉なことに、《民族の血》を防衛するはずの優生思想は、自らに向けられた刃になりかねなかったのである。自らの目的遂行(戦争)の結果として生まれてくる、きわめて多数《傷痍軍人》は、戦争目的をかかげる人たちにとっては、国家に献身した《栄誉》ある人のはずが、現実には《障害者》として生きねばないがゆえに、たとえば、K町の純子が「『跛者チンバ』洋子は侮蔑の瞳、驚きの顔、罵詈訾を幾百度、幾千度受け悲しんで来たことか」⁸⁾と綴ったような差別を受けなければならなかったのだ。事実、地域社会での《傷痍軍人》は、このK町の純子と同様のことがあったようだ。日露戦争に傷ついた兵士は酒におぼれることを母にいさめられて、その苦悩の心中を「お母さんに心配をかけてすまないけど、こんな身体になって帰って来るよりは、いっそ戦友達と一緒に、あの旅順の土になった方がよかったんだ。(中略)生れ故郷の人達だけは、もっともっと優しく、この傷ついた身体を

いたはつてくれるものと喜んで帰って来たのに、これからこの身体で、どうして生きていったらいいのか、考へると全く厭になってしまふんだ」⁹⁾とくやんでいる。あるいは、別な傷兵は「誰もかも俺を馬鹿にすつ。相手にしてくれん」¹⁰⁾と、その怒りを妻に爆発させるような扱いを受けていた。

上記のような《傷痍軍人》の被差別状況が、いわゆる優生運動の展開と、いかほど関わっていたかはわからない。しかし、戦争遂行のために軍人援護に取り組む側に属する人びとにしてみれば、それは決して放置できるような状況ではなかったはずである。おそらくこのような状況認識からであろう、軍人援護策として、「今日新しく傷痍軍人の結婚問題が重要な銃後の国家社会の問題として漸く台頭して来た」¹¹⁾と主張する論者があらわれてくる。この論者によると、「傷痍軍人の結婚問題」は、ふたつの課題を担っている。その第一は「この人々の結婚の成否ならびにその良否如何は、その不屈の軍人精神を振ひ起してあらゆる困苦を克服して、銃後社会に果敢にも再起奉公をなさんとするその『第二の戦ひ』に直接重大な関係をもつもの」¹²⁾であり、その第二は「『名誉の傷痍』なるがゆえに、銃後生活に於ける不慮の災難や過失によって結果した不具、まして病理学的・優生学的に考へられる宿命的不倖な不具者の場合とは、全くその意義なり原因なりを異にするものであることは当然で謂ふまでもないことである。国家から名誉と尊敬と感謝と恩遇を與へられた『傷痍の勇士』である」¹³⁾ということであった。

これらの文言から明らかなように、一方では、《傷痍軍人》の被差別状況を排して、《完全な》市民としての社会生活を確保すること、他方では、一般の障害者のうえに被せられている障害者観を、《傷痍軍人》が被ることがないようにするというのが、「傷痍軍人の結婚問題」に課せられた任務だった。

3 軍人援護策と《傷痍軍人の結婚斡旋》運動

戦争遂行という目的のもとでの軍人援護という問題と、《傷痍軍人》の配

偶者を採すという課題は、いかにして結びついたのでろうか。愛国婦人会の記録¹⁴⁾によると、「支那事変を一転機」¹⁵⁾とする諸情勢に対応して、1938（昭和13）1～2月の地方本支部主事会議において、「婦人報国精神の顕揚を以て主眼とする本会として此の際採るべき方策」¹⁶⁾のひとつとして、愛国婦人会の本支部は、「一、傷痍軍人に対する精神上及び物質上に於ける慰安其の他扶助に関する意見、殊に配偶者に関して考慮すべき点並に対策承り度」「傷痍軍人の将来に関して特に慎重に考慮を要するものあり、更に又配偶者其の他の問題に付之を篤と考慮するの要あるべし、是等に関し適切なる対策承り度」¹⁷⁾というような諮問をおこなっている。より具体的には、愛国婦人会の結婚相談所において、「結婚を希望する傷痍軍人及び配偶者候補たるべき婦人につき双方の希望、身許、其の他結婚に必要な各般の事項を調査し、良縁の斡旋をなすものとす」¹⁸⁾というような形がとられ、「結婚後の指導、保護」¹⁹⁾というところまでなされたようである。その結果については、1939（昭和14）年末までのこととして、「本部に於て十八組、地方本支部に於て報告ありしもの四十七組、未着のものを合して約百三十組に上る挙式を見た」²⁰⁾と報告されている。

ただし、結婚話をすすめる手法については、愛国婦人会だけの独自案というよりは、各方面から参考意見を聴取したようである。たとえば、「傷兵はかく護られてゐる」と題する座談会のなかで、当時、陸軍省医務局長であった三木良英は、前の傷兵保護院計画局長藤原孝夫の《傷痍軍人》の結婚問題に関する「これはやはり各方面の理解と協力といふことがなければ出来ないものでありまして、婦人団体あたりで特に一つこの方面に協力をして貰ふことが適切ぢやないか」²¹⁾という発言をうけて、

それについて愛国婦人会で大分具体的の計画を樹てたことがあったのです。所が其の相談にあづかった多くの意見は、愛国婦人会が考へて居るやうな花嫁学校式のものを作ってやるといふのは現在の状況では適當ではあるまいと言ふのでありました。それは周囲の人の精神的の支援が衰へさへしなければ、所謂隣保相互に相助けて良い嫁を世話してやる。

これが一番望ましい（後略）。

と発言²²⁾していることからわかるだろう。こうした各方面からの参考意見の聴取が、現実の取り組みのなかに、どれほど、いかに生かされたという問題は、ここでは、すべてを後考の課題としている。

上記のような《傷痍軍人の結婚斡旋》という取り組みは、それまでの軍人援護活動にはなかったもののようで、いわゆる満州事変のころと、日中戦争開始の時期との、それぞれの軍人援護の違いをしめしているようである。愛国婦人会の場合でいえば、満州事変のころには、いわゆる《隣組》を核にして、

（前略）其の班内に居住する傷痍軍人、軍人遺家族に対しては、平素懇切に慰藉をつづけ、必要あるに於ては根本的に其の窮状を救ひ、病人や老幼に対しても町会、自治会、方面委員其の他と連絡を執って、それぞれ最善の方法を尽し（例へば一家の柱石たる寡婦が、僅かの賃仕事をして沢山の家族を扶養して居る如き場合止むを得ざれば、老齡者は養老院に、幼児は孤児院に、病人は施療院に送る為に斡旋する等——此の如きは、元来、自治の本義から云へば、市町村の当然の責務に属する事項であり、若し是所まで自治の徹底を期し得るならば、今日不幸な、母子心中や、貧苦故の自殺者等は根絶し居るべき筈であるに拘らず、いつまでもかゝる悲惨事が跡を絶たない。是所に「愛の力」を根本精神とするところの本会が単り、軍人遺家族等に対してのみならず、広く人道の為に立ち上がらなければならない、止むを得ざる事情が存するのでございます。）尚ほ生活扶助を必要とする場合には、之が為に分会、分区特に班は率先して斡旋に力むべきであり、更に一步を進めて授産其の他の為にも尽力すべきであります。（後略）²³⁾

というようなことであつた。それが、日中戦争開始のころに、前記のような、《傷痍軍人の結婚斡旋》というところまで進んでいるのである。さらに、大日本国防婦人会の場合でいえば、満州事変のころのことは、同会の関西本部での事業として、軍人遺家族への無料診療あるいは大阪の産婆会と協力して

の助産・入院費用の無料化といったことが目をひく²⁴⁾。それが、同会の「昭和13年度主要事業」のなかには、その12番目の項目に「各地の婦人団体と協同主催にて婦人協議懇談会を開催し主として左記の事項に就て協議すると共に、研究を重ねたり」²⁵⁾として、「1. 傷痍軍人の婚姻問題解決に関する件、2. 軍人援護に関する件、3. 新道德建設に関する家庭教育の件、4. 其他傷兵保護事業に関し各婦人会としてなすべき事項の具体的方法」²⁶⁾というような事業が揚げられている。

なにはともあれ、こうした取り組みの結果であろう、1943（昭和18）年の資料²⁷⁾に、軍事保護院の調査数値がある。それによると、諸種の団体合わせて1,091組のカップルができあがっている。以下に、その数値をそのまま引用しておこう。

【傷痍軍人配偶者斡旋状況（昭和16.4.1.一同17.6.31.）】

経 営 主 体	相談所数	成立件数
大日本婦人会支部	17ヶ所	80組
大日本傷痍軍人会支部	35	249
市町村銃後奉公会	4	199
其 の 他	16	563
計	72	1,091

（軍事保護院調）

全体としてのトータルな数字をつかんでいるわけではないので、《傷痍軍人》と結婚することになった女性の総数や、その趨勢といったことについて、いま、それを論じることとはできない。上の軍事保護院の数字が一年余という短い期間のものであることを考えると、その結婚話の成立件数は、きわめて多かったとの印象が強いことは事実である。それだけ、多くの女性が、《傷痍軍人の結婚斡旋》という《国策》にまきこまれていったということでもあろう。

それでは、この《傷痍軍人の結婚斡旋》という《国策》は、いったい、何

を目的にしていたのだろうか。本格的には、その答えは、後考にまつしかないのだが、当面のところは当時の厚生省社会局長山崎巖が、1938（昭和13）年に、傷痍軍人に対する「保護指導の方法」について、その考え方を、

単に恩給の支給や救済的応急措置に止めたり、唯勇士々と称号を奉って一時持囃すのみでは、その心持がどうあらうとも真に徹底した優遇保護とはならないのであって、この事は過去内外の実績に徴する迄もなく明かなことである。

況んや傷痍軍人は最早や働も生活意識も缺けた^(ママ)廃人でもあるといふ風に考へたら、凡そ見当違ひも甚だしきものである。隻手、隻脚の人も、或は失明となったやうな相当重い傷痍を受けた人々でも充分に之を保護啓発するならば、身体こそ元の通りにはならないまでも、夫々身に適ふ仕事に精出すことが出来て、更に永く国家の進運に貢献してもらうことが出来るのである²⁸⁾。

と説明している点に注目しておきたい。そこでは、「恩給の支給」というような生活保障だけでもいけないし、「勇士」との「称号」の付与だけでも、それは「真に徹底した優遇保護」にはならないと、まずは主張する。そして、つぎに、「傷痍軍人」＝「廃人」と理解してはならないと言う。この「廃人」と呼ばれる存在こそ、山崎の主張の前後関係からして、優生運動が攻撃の対象にしている《障害者》であると考えることができるのではないだろうか。そうであるとするなら、《傷痍軍人》を優生運動の対象となる障害者から切り離すと同時に、いわば世間の《普通の市民＝一流市民》としての実態・実体をととのえようとしたのが、《軍人援護としての結婚斡旋》であったと言えないだろうか。こうした観点にたてば、山崎の提起する「1. 名誉の表彰、特典の付与、恩給の支給其他の生活の保全に資する各般の優遇方策、2. 健康の回復、保健に資する医療療養施設、義肢の支給、其の他の保護施設、3. 職業相談指導、職業再教育再訓練、就職斡旋」²⁹⁾のような一般的な軍人援護策に不足するものとして、《傷痍軍人の結婚斡旋》という課題が提起されていったのではないだろうか。《妻ある夫》というところに、《普通の市民＝

流市民》という、一種の指標のようなものをみようとしたのかもしれない。そのように考えるとすると、1938（昭和13）年1月に、「傷痍軍人保護対策審議会総会の答申」において、「傷痍軍人ノ保護対策ハ其ノ動員前ノ状態ヲ目標トシテ心身ノ恢復ヲ図ルト共ニ恩給ノ支給ニ加ヘテ傷痍軍人ノ社会的経済的復活ニ資スル各般ノ措置ヲ執ラザルベカラズ」³⁰⁾と宣言されたなかで、「社会的経済的復活」ということのなかに、《傷痍軍人の結婚問題》というように、より日常的、より可視的レベルでの軍人援護が実施されたということになるのかもしれない。

4 《傷痍軍人》と結婚した女性たち

箏曲の大家であった宮城道雄は、1939（昭和14）年に、「傷兵に捧ぐ」と題する文章を発表している。そのなかで、宮城は、

それから、数ある傷痍軍人の中でありますから、御家庭を持って居られる方もおありでせうが、失明の方や、手足の不自由な若い方は結婚といふことに就きましては、非常に心配して居られる方もあるといふことでありますが、私は決して心配はないと思って居ります。私も多くの若い女性の方に箏を教へて居りますが、今の女性の方は物質や栄耀栄華ばかりを望んで居るのではありません。寧ろ精神の正しい、信用のある人を希望して居ります。それにはやはりこちらが修養致しまして人に好かれるやうになることを心掛けたいと思います³¹⁾。

と書いている。宮城のいうとおりであるとするなら、若い女性のなかに、戦時体制下でのある種の精神主義がひろがっていったことになる。そうしたなかで、少なからぬ女性が《傷痍軍人の妻》となっていたことになる。そんな《きれいごと》ですませるのだろうか。それとも、もはや、それほどにまで、女性たちは《時代の波》にあらわれ、飲み込まれていたというのだろうか。『福岡日々新聞』1932（昭和7）年2月18日の《家庭と趣味》欄に「時局に促されて咲き出る愛国の花」の横見出しにくわえて、「軍人と赤十

字看護婦 志願者が激増 婦人商業戦線の拡大とも見える」の三段見出しがつけられ、「押し寄せる応募者百八十 採用者僅か十五、六人」の中見出しがほどこされて³²⁾、「満州事変が若者の血を湧き立たせている現れで、傷病兵を温かい心で看病する赤十字看護婦への志望者の激増、東京本社、地方支部とも今年の養成看護婦の志望者は十倍に達している、とある」とのことである³³⁾。満州事変のときに、このようであったのなら、日中戦争開始以後において、《傷痍軍人の妻》について、同様の現象がおこらないともかぎらないであろう。

そのことの詳細は後考にまつとして、ここでは、《傷痍軍人の妻》となった女性の手記のいくつかを紹介しておこう。

雑誌『主婦之友』の手記募集に応じたことになっている、当時、広島在住の中上マツ子の場合のように、実兄の戦死を深く悲しみ、たとえ片手・片足をなくしたとしても生きていてほしいと思うあまり、「考へれば考へるほど、傷兵様のお世話をさせていたゞけたらといふ望みが、私の頭から離れなくなってしまひました」³⁴⁾というような思いを深くして、《傷痍軍人の妻》となる道を選んだ女性もいた。そして、その結婚の結果、「今では自分が日本一の幸福者ではないかしらと思ふほどでございます」³⁵⁾という状態にあるというのだから、何も言うことはない。あるとすれば、この手記が《やらせの偽り》でないことを祈るばかりである。

上記の手記の真実を信じるとしても、《傷痍軍人の妻》となった女性のすべてを、上記手記の女性になぞらえるわけにはいきそうもない。筆者が『主婦之友』誌上で目にすることができた手記のかぎりでは、《傷痍軍人の妻》となった女性たちは、当の《傷痍軍人》の身内であったり、彼の従軍以前の婚約者であったというような事例が目についた。目を通しえたのは、ほんの数例にすぎないから、全体としての傾向というようなことについては、今は何もいいえないのだけれども、《傷痍軍人の妻》という道を選んだ女性の背後に、このような《現世のしがらみ》とでもいうべきものがあつたかもしれないということを忘れずに、この研究を続けていこうと思う。このよう

に考えるとき、つぎのような事例をわすれてはならないだろう。《傷痍軍人の妻》となることを決心したこの女性は、十五年戦争よりはるか以前の日露戦争の傷兵であるのだが、彼女の身内が、「許婚だったってことだから、断るに断れない義理もあったかも知れないけれど、みすみすあの娘が、不幸の中へ落ち込んでゆくやうな気がしてねえ」³⁶⁾ というような不安にかられている場合が少なくなく、当の女性は、親や身内のこうした形の《反対を押し切る》かのように結婚しているという状況のなかに、その時代的特徴を解く鍵があるかもしれない。

さらに、もうひとつ。夫の実家は嬉野温泉で一番の宿屋を経営していたが、彼は、日露戦争で頭部貫通銃創を負ってしまい、21才の彼女が結婚するときには、「まるで子供のやうに」³⁷⁾ というような状態にあった。この女性は、この男性と結婚して三十五年、「どうして二人が食べてゆくか、どうして不自由な良人を護ってゆくか」³⁸⁾ という課題と対峙しつつ、「お国に一生涯を差し上げてしまったのだ」³⁹⁾ 「良人の一生は、自分が背負って立とう」⁴⁰⁾ と考えることで、自分を支え続けたという。なんとも、すさまじい事例ではあるが、ここまでくれば、《傷痍軍人の結婚問題》といわれているものの目的がまことにリアルに透けて見えているといえるかもしれない。

5 おわりに

言うまでもないことだが、《結婚》という問題は、それが、《当人の意思》でなされるかぎり、それが他人や世間にどのように映ったとしても、他者は何の注文をつけるべき筋合いはない。そうであればこそ、その《当人同志の自由な営み》を、国策に利用しようとするような目論見については、その真の目的がどこにあったのかを、きちんと究明しておかなければならないと考える。その意味で、はっきりと断っておきたいのは、本稿では、《傷痍軍人》という障害者と結婚したということに批判の目を向けているわけでは決してなくて、筆者が注目しているのは、その《結婚》を国策的にした（自由な意

思を奪った)《状況》と《システム》を明らかにしたいのである。その意味では、戦後の国立箱根療養所のドキュメントのなかに、「ここでも矢張り、恋愛はあるのですよ」⁴¹⁾というある妻の述懐に続いて「一号病棟の鈴木さん夫妻は、その恋愛で一緒になった幸福組である」⁴²⁾とあるのを発見すると、安堵を感じてしまうのだが、それは、それで、言うところの《戦後の社会状況》を念頭におくとき、このルポルタージュ一つで、今日、私たちが考える結婚と同義とすぐに考えてよいのか、どうかも、詳細な検討を要するのかもしれない。いずれにしても、十五年戦争の敗戦(=戦争終結)ということによって、《傷痍軍人の結婚問題》としてなされたことが解決・終了するはずもないわけで、戦後社会のなかでの諸課題も忘れてはならないということだけは明らかなことである。

他方では、国家権力の名のもとに、強権的に《障害者》をつくりあげ、その障害者の《屈辱》の怒りを、当の国家権力に向かわせないようにしていたものが何であったかということも、鋭く問われなければならないだろう。

注

- 1) ならの女性生活史編さん委員会編『花ひらく—ならの女性生活史』奈良県女性センター刊 1995
- 2) 加藤博史『福祉的人間観の社会誌—優生思想と非行・精神病を通して』晃洋書房 1996
- 3) 戸谷清一郎「遺伝の恐るべき事実」(『廓清』25-5, 昭和10年5月)。ただし、本稿では、復刻版(龍溪書社版, 1980)第25冊によっている。
- 4) 廓清会本部発行『廓清』(同上, 復刻版第8冊所収)。
- 5) 油谷治郎七「民族衛生論」(『廓清』6-4, 大正5年4月)10頁, 同上復刻版第6冊所収。
- 6) 戦後, いちはやく, 国民優生法を論じた寺尾琢磨は, 《悪性の遺伝》を防ぐという国民優生法の基本的な考え方については, 「凡ゆる時代凡ゆる場所を通じて妥当する普遍的性格をもっている。何者についても質は良いほど望ましいのが定石であるから」(1頁)としながらも, 「同法は昭和十五年五月の発布にかゝり, 従って時間的には例の人口政策確立要綱に約半歳先んじているが, 元々後者は満

州事変以来の産めよ殖やせよ主義を成文化したもので、優生法発布当時極端な増殖論は既に充分根を張っていたのである。即ち実際には優生法は確立要綱の一附属規定に過ぎない。然るに確立要綱は人も知る通り共栄圏の夢の上にでっち上げられた神懸りの民族主義の表現に外ならなかったから、敗戦と同時にいち早く廃棄されて了った。ところがその附属物たる優生法は依然そのまゝで、法律的には今もなお同じ効力をもっている。不思議な話といわねばならぬ」(1-2頁)と、その背景を説明したうえで、国民優生法の運用経過について、「同法が効力を発生した昭和十六年七月以降十九年までに同法によって断種手術を受けたもの約四百名があったわけで、同年以降は全く中絶状態である」(2頁)と報告し、国民優生法に現実的実効性が乏しかったことを強調している。戦後、間もない時期の論調として、記憶にとどめておきたい(寺尾琢磨「国民優生法の社会問題への適応」『社会事業』30-9・10, 昭和22年9・10月)。

- 7) 穂積重遠著『結婚訓』中央公論社, 1941年10月。この書は「国民優生聯盟蔵版」と明記されている。なお, 筆者が利用した版には「昭和十七年九月十五日第四刷発行(10000部)」とある。
- 8) (K町) 純子「私の歩んで来た道・不具者として」(『婦人之友』昭和13年4月) 92頁。
- 9) 田口とき子「幸福な家庭を築き上げた体験・読者の体験 右足を失った貧しい戦傷者と結婚して」(『主婦之友』昭和13年7月) 258頁。
- 10) 主婦之友特派記者「傷痍軍人の処女妻となって三十五年 高柳さいさんの純愛物語」(『主婦之友』昭和16年12月) 138頁。
- 11) 渡邊亦男「傷痍軍人の結婚問題」(西牟田重雄編『戦争と結婚』所収 牧書房刊 1942) 238頁。ただし, 本稿では, 復刻版の『近代女性文献資料叢書』第9巻『女と戦争』大空社 1992によっている。
- 12) 同上書238-239頁。
- 13) 同上書239-240頁。
- 14) 飛鋪秀一『愛国婦人会四十年史』愛国婦人会刊 1941。ただし, 本稿では, 復刻版『愛国・国防婦人運動資料集』2 日本図書センター刊 1996を利用している。
- 15) 16) 同上書750頁。
- 17) 同上書751頁。
- 18) 同上書788頁。
- 19) 20) 同上書789頁。

- 21) 22) 「座談会・傷兵はかく護られてゐる」(『文芸春秋』1939年5月臨時増刊号) 135頁。
- 23) 前掲『愛国婦人会四十年史』682—683頁。
- 24) 『大日本国防婦人会十年史』(昭和18年)。前掲『愛国・国防婦人運動資料集』5所収501頁。
- 25) 26) 前掲同書461頁。
- 27) 『日本社会事業年鑑』昭和18年版。本稿では、文生書院による復刻版(1974)99頁によっている。なお、同書によると、各地の地方長官に宛てた軍事保護院援護局長の「傷痍軍人の配偶者斡旋に関する件」(昭和16年6月3日付)と題する留意事項が記されている。それには、

「傷痍軍人」の配偶者斡旋に関する件

標記の件に関しては既に夫々御配意のことと存候処傷痍軍人に対し好配偶者を斡旋し愈々再起奉公の志操を固め率先垂範聖戦完遂の推進力たらしむるは極めて緊要のことに有之素より之が斡旋に付ては其の親戚知己等の力に俟つを本旨とするも多数の傷痍軍人中には傷痍疾病の種類、程度又は境遇等に依り自然に放置し難きもの有之実情に鑑み右に対しては特に積極的に之が斡旋を為すの要あるものと思料せられ候に付いては関係各機関及団体の協力を求め概ね左記諸点に御留意の上所期の目的達成に遺憾なきを期せられ度

記

- 1 市(区)町村恩賜財団軍人援護会支部、大日本傷痍軍人会支部、各種婦人団体、銃後奉公会等関係各機関及団体相互間に密接なる連繫を保たしむる措置を講ずること
 - 2 一般国民特に結婚適齢期にある婦女子に対し傷痍軍人を正しく認識せしめ進んで傷痍軍人の配偶者たらしむる思想の涵養に努むること
 - 3 既設の一般結婚相談所中適當なるものに対しては傷痍軍人部門を設けしめ又必要の地には傷痍軍人結婚相談所を新設すること
 - 4 関係各機関及団体関係者中の適任者の其の他方面委員、遺家族指導員等をして特に傷痍軍人の結婚斡旋に協力せしむる措置を講ずること
 - 5 本件経費は別途令達の見込なるも貴道府県に於ても事情の許す限り道(府県)費其の他を支出し実施に付万全を期せられたきこと
 - 6 本件に関し講ぜられたる措置に付ては其の都度之が概要を報告せられたきこと」(同上書98—99頁)とある。
- 28) 29) 「傷痍軍人を如何に保護すべきか」(『話』1938年5月) 243頁。

- 30) 本庄繁（当時、傷兵保護院総裁）「傷痍軍人と国民」（『中央公論（傷病兵の諸問題特輯）』昭和13年6月）321頁。
- 31) 宮城道雄「傷兵に捧ぐ」（『文芸春秋』1939年5月）110頁。
- 32) 川嶋保良『婦人・家庭欄こと始め』238・240頁。青蛙房 1996。
- 33) 同上書240頁。なお、同書には、こうした看護婦志願者激増に関して、日赤福岡県支部宇都宮主事の「赤十字看護婦は戦地に行けば最低五十円に五割の割増手当が支給され、戦地では出征軍人と同じ扱いを受ける。勲章も下賜され、戦死すれば靖国神社に祀られる。こうした特典もあり、愛国の美しい花として咲きたい熱望と、職業としても立派なので、勢い時代の流れに応じて志願者もふえたのだろう」というようなコメントも紹介されている（240頁）。
- 34) 「読者の体験・結婚難時代に良縁を得た婦人の体験」所収、中上マツ子「傷痍軍人と幸福な結婚をした体験」（『主婦之友』昭和17年10月号）47頁。
- 35) 同上手記49頁。
- 36) 田口とき子「右足を失った貧しい戦傷者と結婚して―読者の体験・幸福な家庭を築き上げた体験」（『主婦之友』昭和13年7月号）356頁。
- 37) 「傷痍軍人の処女妻となって三十五年―高柳さいさんの純愛物語」（『主婦之友』昭和16年12月号）137頁。
- 38) 同上手記137頁。
- 39) 40) 同上手記138頁。
- 41) 「忘れられた群像」という三つのルポルタージュのうちの「戦傷者」（『サンデー毎日』1950年10月29日号）34頁。
- 42) 同上ルポルタージュ34―35頁。